



基礎教育センター元年に思う

基礎教育センター長 落合 洋文

平成24年4月に名古屋文理大学基礎教育センターが発足した。同センターは専任教員3名を擁し、日本語力I・IIと数的処理I・IIの2科目(1年次前後期必修)を担当するほか、近隣の高等学校との高大連携事業にも中心的な役割を果たす。

同センターは過去2年間にわたる基礎教育検討委員会の論議を経て発足したもので、本学のようなユニバーサルアクセス型の大学において、多様な学習履歴や学力を持った学生たちが高度な専門教育に移行できるようにすることが最大の使命である。このため日本語力I・IIでは、大学での学習全般に不可欠の言語コミュニケーション能力を強化するため、文章デッサンやディベートなど表現力に重点を置いた授業を行っている。数的処理I・IIでは、文科系の学生にとっても比較的必要性の高い統計学に注目し、さまざまな具体的事例の中から統計処理に関する問題を抽出し、実験やグループ作業を行いながら数学力を強化する。教材は本学学生の興味や学力レベルに合わせ、本学教員が作成している。両科目とも主体的に表現したり、手や体を使って考えたりすることが求められるため、高校まで受け身の学習に慣れた学生には新鮮であると同時に戸惑いもあるようである。

学習効果を高めるため、いずれの科目もクラス規模を50人未満に抑え、講師1名に対して補助者1～2名を配置し、演習形式で授業を行っている。学力にもとづくクラス分けはしない。ただ学生が自身の基礎学力を自覚しやすいように、入学時に簡単なチェックテストを行う。学生はその結果をもとに学習目標を立て、その達成度を評価する。評価は客観評価と学生自身による自己評価を総合して行う。学習目標や成果はフレッシュマンセミナー担当者が個々の学生の学生カルテに記録し、4年間を通して学力特性や学習履歴が把握できるようになっている。

授業は基礎教育センターの専任教員に加え、各学科の教員が分担して行う。学習状況の確認や個別的な指導はフレッシュマンセミナー担当者と協力して行うのが理想的であるが、授業を担当しない教員が学習内容まで踏み込んで個別に指導を行うことは難しいようである。

前期を終わった段階での学生による授業評価アンケートの結果は、どちらの科目も5段階評価の3であった。数的処理Iは学力の高い学生には易しすぎ、その他の学生にはやや難しかった。また学科の教育内容との関連性が見いだせないという声も少なくなかった。そのため数的処理IIではある程度学科の内容に即した教材に変更した。全体を通じて担当教員によって授業評価が大きく異なった。学生と教員が楽しみながら発見的に学ぶ、また立場の違いを超えて1人の人間としてお互いを尊重するという基礎教育センターの方針を担当者全員に浸透させることが今後の課題である。

基礎教育センターではこの他にも、高大連携協定を結んだ県立稲沢東高校の生徒に対して国語表現法や化学実験の授業を定期的に行っている。生徒は高校の枠を超えた内容をいつもとは違った環境で学ぶことで学習意欲が刺激され、教員も教授法や教育内容を見直すきっかけが得られるため、授業改善に役立つとの評価を得ている。基礎教育センターとしてもこのような連携事業から得られる情報をさまざまな角度から分析し、学生の学習指導に役立てていきたいと考えている。